第 5 回: ソシュールと記号論

Ferdinand de Saussure
1857–1913

ソシュールを紹介する。ソシュールの言語学、言語観とともに、記号論 (semiotics) について考える。また、記号論 (semiotics) と意味論 (semantics) の違いについても考える。フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857 年 11 月 26 日–1913 年 2 月 22 日）はスイスの言語学者、言語哲学者。記号論の基礎を築き、その後、構造主義思想に影響を与えた。

実証的な歴史研究である比較言語学の研究が盛んなドイツでソシュールも比較言語学を専攻した。「近代言語学の父」といわれる。言語学者のルイス・イェルムスレウ、ロマーン・ヤーコブソン、レヴィ・ストロース、メルロ・ポンティ、ロラン・バルト、ジャック・ラカン、ボードリヤール、ジュリア・クリステヴァなどに影響を与える。ソシュールは言語の要素間の関連性に注目し、言語の構成や体系性を明らかにしようとした。ラング (langue) とパロール (parole) の概念を用い、言語の現象 (parole) を分析し、言語の実態 (langue) を解明しようとした。

後述のクルトネは、個々人の頭の中に存在する言語と社会上存在する抽象化された言語を明確に分け、前者はパロールで後者はラングと位置づけた。比較言語学は同族の言語の変化を研究する学問である。一方、対照言語学は異なる語族の言語の違いを研究する学問である。

1 サイン、シグニファイア、シグニファイド

サイン（sign）、シグニファイア（signifier）、シグニファイド（signified）は、フランス語ではそれぞれシーニュ (signe)、シニフィアン (signifiant)、シニフィエ (signifié)、日本語では、記号、指し示すもの、指し示されるものと呼ばれる。ソシュール言語学は記号論（semiotics）の始まりといわれる。

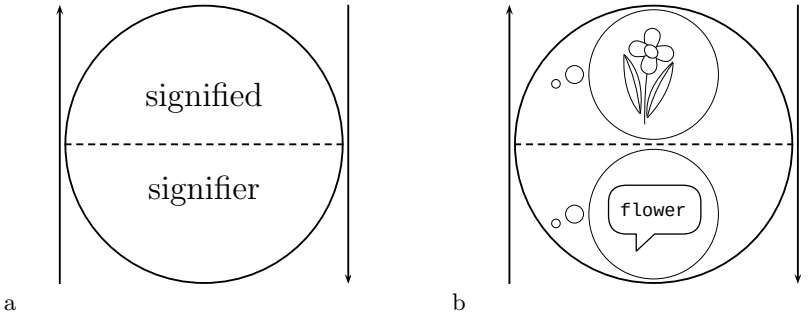


図 1: ソシュールの記号のモデル (Chandler 2002: 18–9): a) ソシュールのダイアグラムでは記号が丸として締めされその中に 2 つの部分（シグニファイアとシグニファイド）が含まれる。上向き矢印はシグニファイアからの見方、下向き矢印はシグニファイドからの見方である。水平の点線はその境目がどこからシグニファイアでどこからシグニファイドであるかがはっきりしないことを意味する。b) ダイアグラムを花を例に当てはめた図である。シグニファイアは音声記号で、シグニファイドは視覚的な花のイメージである。

シグニファイアとシグニファイド

シグニファイアは語のもつ感覚的側面のことで、たとえば、花という言葉の「花」という文字や「はな」という音声のことを言う。シグニファイドは花のイメージ、花という概念ないし意味内容のことを示す。また、表裏一体となったシグニファイアとシグニファイドとの対のことを、「サイン」(sign) すなわち「記号」と呼ぶ。

シグニファイアとシグニファイドの関係には必然性はない。「花」そのものを「花」と書き、「は・な」と発音する必然性はどこにもない。記号は恣意的に用いられている。これを記号の恣意性という。必然性がないにもかかわらず、

それが了解される体系のなかでは必然化されている。

日本語を理解する人が「花」という字を見て、「は・な」という音を聞くとき、そこでイメージされるものの根底は**基本的に同じ**である。また「花」はどうして「は・な」というのか、という質問に答えることは非常に難しい。

問 1　指し示すものと指し示されるものの関係を他の例を用いて、自分自身のことばで説明せよ。

問 2　指し示すものと指し示されるものの関係が、

a. あなた自身の頭の中で考えている場合、

b. あなたが指し示し、それをあなた以外の人が聞いている場合、

c. 逆にあなた以外の人が指し示し、それをあなたが聞いている場合、

の 3 つの関係を具体例を用いて、説明せよ。

問 3　上記の 3 つの場合で起こりうる問題点について話し合え。

問 4　上記の問題点は実際のコミュニケーションではどのように解決されているのか、話し合え。

2　言語相対論

言語によって世界が違う？！

ソシュールは、言語の音韻も、そしてそれを表す概念も、言語によって区切り方が異なることを示す。

日本語は、音を 50 音で区切っている。「ア」という音は、それ以外の音（イ、ウ、エ、オ、…）と区別する。音の区別の仕方は、言語によって異なる。日本語の音韻体系では、[r] と [l] の区別もなく、四声（中国語）の区別もない。言語の音を区別しはじめたら、無限に分類できるはずではあるが、日本語では 50 音に、他の言語も独自の方法で音を区別している。

概念についてはどうだろう。たとえば、虹の色は物理学的には無限であるが、7 色だけでなく、3 色という言語もある。日本語では「マグロ」と「カツオ」を区別するのに、英語では両方とも ‘tuna’ である。

日本語の「らくだ」の呼び方は、「ひとこぶらくだ」「ふたこぶらくだ」ぐらいで、その呼び方は多くないが、アラビア語でラクダを表す総称はジャマルであるが、それ以外にもさまざまに呼ばれる。たとえば、ハワール（6 か月まで）、マフルード（1 年まで）、ヘッジ（2 年まで）、レジ（3 年まで）、ジェデア（4 年まで）、シニ（5 年まで）、ルバー（6 年まで）、シディース（7 年まで）、シャーグ（8 年まで）など。ジャマルはラクダのオスで 8 年以上を指す言葉となっている (本多 1981)。

どのような区別に注目するかは、言語それぞれの話者による「恣意的な選択」である。その選択が言語固有の体系を作り、その体系が逆にその言語の話者たちにとっての「世界」となる。これをソシュールは「価値」と呼ぶ。英語の ‘sheep’ とフランス語の ‘mouton’ は、シニフィエは同じでも、その言語の話者にとって「価値」が異なる。つまり、言語によってそれぞれ固有の「価値」があるのである。

問 5　ある言語では区別しないのに、ある言語では区別する。これはなぜか。

問 6　日本語でいろいろ表現するが、外国語では 1 つないし 2 つの語でしか言わないものを考えよ。

問 7　図 2 を見て、どちらが Booba で、どちらが Kiki であるかを答えよ。

問 8　言語は本当に恣意的であるかどうかを議論せよ。

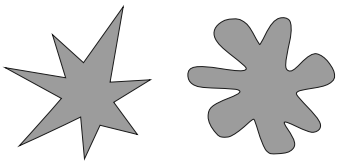


図 2: Booba はどちらで、Kiki はどちらか (Maurer et al. 2006)。

3 言語学者の資料

言語学者の中でもソシュールは古い研究者にあたる。そのような古い研究者の考えを学ぶにはどうしたらよいのだろうか。

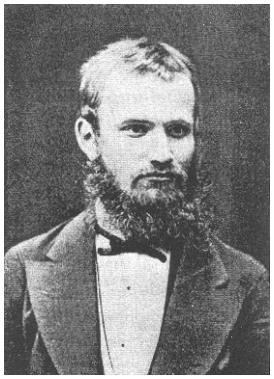
> **講義ノートと原資料**
>
> ソシュールは存命中一冊の著書も出版しなかった。晩年の 1906 年から 1911 年にかけて、計 3 回ジュネーヴ大学で行われた一般言語学についての講義をソシュールの弟子たちがまとめた。『一般言語学講義』がそれである。ただし、弟子たちはこの講義をジュネーブ大学の別の講義に出席したため直接聴いていない。また直接講義を受けた学生らによる講義ノートがエディット・パルクから第 1 回から第 3 回まですべて出版されている。
>
> 1954 年頃からジュネーブ公共大学図書館でソシュールの講義ノート等の資料が収集された。1957 年には、ゴデルにより『一般言語学講義の原資料』、1968 年にエングラーにより『一般言語学講義』改訂版が刊行された。
>
> 日本への紹介は、小林英夫による邦訳初版が、ソッスユール述『言語學原論』と題して 1928 年に岡書院から出版された。その後、出版元を岩波書店に変え、1972 年刊行の改訳版で『一般言語学講義』と改題され、出版された。丸山圭三郎は「ソシュールの思想」と「ソシュールを読む」を刊行した。その精緻な研究によってソシュールが歪曲されたまま伝えられたことを指摘した（フェルディナン・ド・ソシュール–Wikipedia より）。

問 9　ソシュールを引用している現代の研究者はどのようにソシュールの言語学、言語観を学んでいるのだろうか。

問 10　ソシュールの講義を直接聞くことができない今、あなたが学ぶ／学んだソシュールの言語学にはどのような注意が必要だろうか。

問 11　ソシュールは存命中一冊の著書も出版しなかったのに、なぜ有名な学者となったのだろうか。

4 ボードゥアン・ド・クルトネ



Baudouin de Courtenay
1845–1929

ボードゥアン・ド・クルトネ (Baudouin de Courtenay, 1845–1929) は、フランス系ポーランド人で、帝政ロシアで活躍した言語学者。ロシア語で書かれた論文が非常に多いことなどでロシアの言語学者として数えられる。

ソシュールと並ぶ構造主義の先駆者で、ソシュールは、少なからずクルトネの影響を受けていたといわれている。しかし、カザンというロシアの辺境で活躍していたことから、ソシュールのように広く知られることはなかった。

構造主義の基礎概念（言葉の記号性、形態素、および音素の概念、通時態と共時態の明確な区別、ラングとパロールの区別など)、言語変化における経済性、音声学と音韻論の区別など言語学における主要な概念を提案した（ヤン・ボードゥアン・ド・クルトネより)。

5 クルトネの言語変化における経済性理論

クルトネは言語変化には以下の５つの方向性があると主張した。

1. 無意識的な習慣
2. 言葉をより使用の楽な体系にしたいという気持ち
3. 忘れること
4. 同じ形式の２語の場合、それらを区別したいという無意識な気持ち
5. 一般化

問 12　クルトネはなぜ５つの方向性があると主張したのだろうか。５つの方向性のそれぞれについて理由を考えてみよ。

問 13　この５つの方向性で、言語変化が説明できるかどうか考えてみよ。

問 14　なぜクルトネは「経済性理論」と名づけたのか、理由を考えよ。

6 もっと知るには

1. 丸山 (1981, 2008) が代表的で入手しやすい資料である。
2. Saussure (1983) は、ソシュールの講義を筆記し、出版したもので、フェルディナン・ド・ソシュール (1972) は、その日本語訳である。
3. 記号論の入門書としては、Semiotics the Basics (Chandler 2002) がお勧めである。入手できない場合には、ほぼ同様の内容が、Semiotics for Beginners（英語版, 日本語版）というタイトルでインターネット公開されている。
4. ジョナサン・カラー (1978) もわかりやすい本である。古い本なので、入手しにくいだろうが、図書館でなら読めるかもしれない。
5. 記号論について興味を持った人は、池上 (1984) を読むとよい。記号論の代表的な研究者、思想、問題点が紹介されている。

参考文献

Chandler, Daniel (2002) *Semiotics The Basic*: Routledge.

ジョナサン・カラー (1978) 『ソシュール』，岩波書店．川本茂雄 (訳)．

本多勝一 (1981) 『アラビア遊牧民』，朝日新聞社．

池上嘉彦 (1984) 『記号論への招待』，岩波書店．

丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』，岩波書店．

——— (2008) 『言葉とは何か (ちくま学芸文庫)』，筑摩書房．

Maurer, Daphne, Thanujeni Pathman, and Catherine Mondloch (2006) “The shape of boubas: Sound-shape correspondences in toddlers and adults”, *Developmental science*, Vol. 9, pp. 316–22, 05.

フェルディナン・ド・ソシュール (1972) 『一般言語学講義』，岩波書店．

Saussure, Ferdinand de (1983) *Course in general linguistics...*: McGraw-Hill. tr. of Cours de linguistique generale. from the French by Bally, Charles and Sechehaye, Albert.